

第5章

参加者の声



荒木 尊士

私が日米学生会議で得たのは、日本の将来に対する漠然とした「不安」と、国際人としての日本人のベンチマークである。私は留学や日本国外に住んだ経験がなく、日米学生会議が初めての、同世代の外国の学生と生活し、議論する機会だった。日米学生会議を終えて、漠然とした「不安」を覚えた。この不安は私個人に対する不安というより、日本の将来に対する不安である。隣の芝は青いと感じただけかもしれないが、米国人学生は陽気で、表現が上手で、歴史にも通じていたように思う。日本は今後、国内の課題が深刻化し、外国との競争が激化するだろう。その際に、現状の日本で戦えるか不安を感じた。日本の学生は、競争している相手を知り、日本の歴史・文化や、表現方法を貪欲に学ぶべきだ。また、日米学生会議では、将来、国外で活躍するであろう同世代の日本人学生、国外で活躍しているアラムナイと出会い、国際人としての日本人のベンチマークを得た。普段、外国で働く日本人と接する機会が少ない私には、彼らの視野が広く、前向きに努力する姿は大きな刺激となった。

生まれも育ちも全く異なる参加者と共同生活を送り、英語で議論を行ったことを通じ、言葉や国籍は個人の「相互理解」をする上で大きな問題ではないことがわかり、私の人生の大きな糧となった。また、一生付き合っていきたいと思える多くの仲間を得た。大学では学ぶことの出来ない多くのことを学ぶ機会を設けて頂き、日米学生会議に関わった全ての方々に御礼申し上げます。

伊井 佐織

本会議を終えてから早くも一週間が経過し、やっと日常の生活を取り戻した今、改めて私にとって JASC は何だったのかを考える。一般化して活字にすることは難しいが、強いて言うなれば、自分自身と向き合い、かけがえのない仲間と出会えた場所であった。

近年「グローバル化」、「国際理解」と口を揃えて唱えられているが、使い古されているあまりその本質が見えにくくなっている現実がある。しかし、その全ての礎に自己理解があると私は考える。自国の理解なくして他国を理解することは不可能である。本会議を通して京都、長崎、岩手、東京を米国の学生と回ることで、自国を新たな視点で見つめ直すことができた。そして同時に、自分の国に対する理解の浅さを痛感した。長崎で被爆者の体験談を直接聞き、岩手のホームステイで現地の人々の温かさに触れることで感じられる思いは、教科書の活字だけでは決して得ることが出来ない。「人」対「人」のコミュニケーションが相互理解において如何に重要な役割を果たすかを実感した。

また、この一ヶ月は自分自身と真摯に向き合う機会にもなった。知的好奇心と才能に満ちあふれ、尚かつ向上心を忘れない JASCer の中で自信を失い、自分の役割を見出せずに苦しんだ時期もあった。人前に出て話すことを最も苦手とするが故に、JASC で与えられたチャンスを最大限活かせなかったことが悔いは残る。しかし、成長するための課題をこの会議で見つけることが出来ただけでも自分にとって大きな前進であると思う。そして、そんな私に声を

かけてくれた仲間に何度も救われ、その度に JASC の魅力を痛感した。

この経験が自分にとって **Life-Changing Experience** であったかは、はっきり言ってまだ分からない。しかし、一つ断言できることは、この 四ヶ月間を通して悩み尽くして考えたこと、普段は出来ないような素晴らしい経験の数々、そして大切な仲間と過ごしたかけがえのない時間、全てが今の自分を作り、そしてこれから先も自分の糧となっていくであろう。この会議を通して得た経験を、活かすも殺すも今日からの私達の行動に委ねられている。将来この経験が **Life-Changing Experience** であったと胸を張って言えるよう、日々精進する次第である。



飯島 千咲

多くの方々に支えられ、自分の未熟さを感じながら EC として過ごしたこの 1 年間、失敗や反省は数え切れないが、結局、完璧ではないことにはそれ固有の美しさがあるのだと、過去を単に美化しているわけではなく、心からそう思える。

長崎サイト担当として、それまで行ったことのなかった土地で初めて出会う人々と、まっさらだったページから何かを創り上げるという過程において、自分ができたことはほんの僅かであったように感じる。それ

でも点と点が繋がっていくように、JASC に関心をもって協力して下さる方が増えていき、できなそうだったことができるようになり、ひとつひとつ創り上げていく実感を持ちながら企画に取り組めたことは、快感の一言だった。

日米安全保障に関する RT のリーダーとしては、デリ自身が悩み、考え、自らで解決して RT を創り上げて行って欲しいという想いを芯に活動した。しかしながら本会議中は、自分で据えた哲学の恣意性によってデリを苦しめてしまったり、難しい立場に置いてしまい自分も辛い思いをしたりと、去年デリとして参加した JASC では経験しなかった困難や壁にぶつかることが多かった。それでも一緒に 4 ヶ月もの間、懸命に活動してくれた RT のメンバーには、感謝と愛の気持ちで一杯である。

また、この 1 年間誰よりも長い時間を共に過ごし、様々な苦労や喜びを分かち合った JEC の皆には感謝してもきれない。7 人それぞれから学んだことは数え切れず、自分に欠けているところや足りないところがたくさん見えた。心から、ありがとう。7 人それぞれの将来が本当に楽しみで、どんな道を歩んでも、どんな形であれ、そこに JASC での経験が、EC としての経験が活きているといいなあと心から思う。そしてこれは、自分自身を含めた全ての JASCer、そして JASC に携わって下さった多くの方々に望むことでもある。

今後もずっと大切にしたいと強く思える多くの人たちと出会えたこと、JASCer であることによって、これからもこう思える人たちがきっと増え続けるであろうこの可能性に、わくわくできる幸せを噛みしめて

いる。JASC を通して、特に実行委員として得た経験や学んだことは、少しずつ形を変えながら、ゆっくりと自分の中へと溶け込んで、この先また新たなことを始める際の糧となっていくだろう。

最後になりますが、第 65 回日米学生会議の実現と成功にご尽力頂いた全ての方に、この場を借りて心からの感謝を申し上げ、参加者の声と致します。

市毛 裕史

この 2 年間、常に問い続けた事は「日米学生会議とは何なのか。」であった。Life changing experience といわれるが、はっきりいって一ヶ月の議論で世界は変えられないし、自分自身さえ変えることも稀だろう。世界はそんなに簡単に良くなるし、自分は相変わらず自分にしかなることができない。しかし、JASC の不思議な一ヶ月は、世界を、自分を変えるきっかけ、つまり種を捲いてくれたように思える。そう、友情という名の種である。そしてこの種はどんなに小さくとも、将来いつの日か、世界の平和という陳腐かもしれないが目指すべき崇高な精神の実現に向けて実を結び、綺麗な花を開かせると、今確信している。「日米学生会議とは何なのか。」という問いはこの日米学生会議が今後永遠に会を重ねていくに従って、次世代の JASCer たちに受け継がれ続ける問いなのかもしれないし、常に悩み問うて行って欲しいと切に願う。

この一年 JASC が人生の中心だったが、本当に出来の悪い実行委員だったと深く反省するばかりである。こんなにも多くの方にご迷惑をおかけし、こんなにも多くの方と語り合い、こんなにも多くの方と笑い合

った一年はなく、会議が終わった今この一年はとても貴重で幸せな期間であったとしみじみと感じている。深夜に及ぶ会議、度重なる交渉、そして米国のトップ学生と共に会議を形作る刺激的な毎日。多くの犠牲を払い、たくさんのを失ったが、この伝統ある会議の開催に携われた事は自分にとって生涯誇りになるであろう。

最後になりますが、一年半 JASC に没頭する自分を支えてくれた家族、心から信頼できる存在になってくれた JASCer のみんな、お忙しいのにも関わらず惜しみないお力添えをいただいた Alumni の皆様、共に会議を成し遂げた実行委員のみんな、会議の開催を可能にしてくださった全ての皆様、そしてこの報告書を手にとり読んでくださっている全ての皆様に心からの感謝を申し上げます、報告書の結びとします。本当にありがとうございました。

伊藤孝真

涙と感情は比例している。感情がある一定の量を超え、自分の中で留めきれなくなると、それは涙となって自分の外へと流れ出る。日米学生会議がどんな会議であったかを伝える最も簡潔で明瞭な方法は、自分自身の涙の記録を辿っていくことではないか、と私は考える。

一度目は、本会議前日の直前合宿の時。誰よりもグループ全体のことを考え、それを行動に移している仲間の、悩み、頭を抱え込む姿に涙した。これだけ真剣に参加者全体のことを考えてくれている彼の存在に、自分自身もこのままではいけないと、本会議直前にあらためて気を引き締められた。

二度目は、春合宿からずっと一緒に

JASC のことを考え、将来の目標や夢を共有してきた仲間との別れ。彼は会議初日から体調が優れず、それでも良くなることを願い行動を共にしていたが、会議半ばで入院することに。どんな場面でも境遇を共にしてきた仲間との別れは本当に辛い。

三度目は、アメリカ側参加者との理解の不一致により、お互いが掴み合い夜中に本気で喧嘩をしたとき。最後にお互いが言い合った「I trust you」の言葉に二人とも涙してしまった。

四度目は、3 週間に渡る分科会活動の成果をみなさんに発表するファイナルフォーラムにて。全てを含めた自分自身の不甲斐なさ、そして悔しさに涙してしまった。

最後の五度目は、アメリカ参加者との別れ。物語のエンドはハッピーエンドと決めている私は、絶対泣かないつもりで歯を食いしばっていたが、結局アメリカ参加者を乗せたバスが視界から消えるころには、涙は止まらなくなっていた。

こんなにも自分の中から感情が溢れだし、自分自身がわからず、混乱してしまう経験は JASC が初めてだった。

これからこの経験を少しずつでも消化し、次に活かしていけたら、というのが今の私の率直な感想だ。



上江洲 仁美

感動。私の JASC での体験を一言で表すならこの言葉に尽きると思う。春合宿で初めて 65 回の日本メンバー全員と顔合わせをしたとき、本会議でアメリカ側の参加者全員と出会えたとき、私は感動した。あり得ないくらい論理的で、真面目で、努力家な人々。半端ない人々との出会いに感動した。どういう風に考えたらそんな論理を立てられるのだろう、一体どういう思考回路になっているのだろう、といつも感心半分不思議半分だった。今までなんとなく感覚で生きてきた私にとっては、全く初めての世界を見た気がした。

そして私が真っ先に伝えたいのは、感謝である。くさいかもしれないが、最近私の心に溢れて止まりそうもないので、是非伝えたいと思う。まず多くの支援者の方々、人生で二度とない貴重な夏をありがとうございました。そして両親、いつもの温かい応援と愛、また決して安いとは言えない参加費用をありがとうございました。近い内に必ずお金にかえられない価値を出して返します。また JASC 参加者全員、私と出会ってくれて本当にありがとうございました。私と喋ってくれてありがとうございました。まだまだ私だけ、近い内にきっと皆に追いついて、皆と肩を並べて歩けるように精進します。最後に私の体、歩ける動ける、こんなに素晴らしいことはないです。手さん足さん、ありがとう。

日米学生会議は私に足りないところが全てそろっていたところであった。私に一番似合わない会議で、途中で逃げ出してしまうのではないかと思った。自分を表現すること、声があること、自分の意見を言うことの大切さを学び、何より、自分が何も知

らないのだということを知ることが出来た。

これまで築いてきた自信や自負が見事に砕かれ粉々になって、私の心の中は今殺風景だけど、なんだか清々しくてフレッシュな気分だ。逆に視野が拓けて、自由にどこにでも行けそうな感じ。私は新たなスタートラインに立ち、世界を踏ん張って生きていく。濃厚で贅沢で、人生で一度きりの眩しい夏をありがとうございました。

ヴェー ホアン ミン

日米学生会議に参加するのは今回で2回目だった。デリとして参加した第64回日米学生会議と、今回 EC として参加した第65回日米学生会議の経験は全く異なったものだった。「楽しかった日米学生会議をここで終わらせたくない」という単純な気持ちで挑戦することを決めた実行委員の仕事がここまで貴重な経験になるとは、当時想像もつかないものだった。この報告書の感想文を作成するあたり、去年の報告書の自分の感想文を読み直した。そこで気づいたのは、去年のデリの自分と比べて、今の EC の自分がどれだけ成長して来たことだった。そして日米学生会議に対する理解に関しても同じことが言える。デリの頃、JASC の1割を見られたとすると、実行委員になってからもう4割ほど見られた気がする。

とは言うものの、第64回も第65回も本会議、そしてその準備期間の時間を充実に過ごせたが、両方満足して終える事はなかった。不満が残ったからこそ日米学生会議に参加する意味があるのではないかと、この1年半を通して学んだ。満足して望み通りに完結してしまうよりも、課題を残し、人生の次のステップに繋いでいけた方が、

やり甲斐があるからだ。「JASC が終わってからその甘みと苦みが効いて来る」というのはこの事なのかも知れない。本会議が終わってから間もない今は、表面に見えるインパクトしか実感できない。しかし、その裏側にある JASC の本当の意味、残りの5割は、これから人生を過ごしていくにつれ、時間と共にどんどん見えて来るものなのかも知れない。

「綺麗に終わらないから、綺麗である」

一年間最も共に時間を過ごした実行員のまあやから聞いたこの言葉を忘れる事はない。

これからこの71人がお互いの人生にどう関わっていくのか観るのが楽しみだ。

大西 由起

「日本を知りたいければ、外から日本を試してみろ。」これは小泉進次郎さんが東京サイトでのご講演でお話された言葉である。つまり、日本をより深く知るためには、海外経験を通して日本の素晴らしい所や逆に日本に足りない所を発見することができるのだという、彼のこの言葉が印象に残っている。もちろん、日本国内にいただけでは日本の良さや問題に気付かないこともある。しかし、この日米学生会議は日本にいらながらも、海外で経験したようなものを与えてくれた。私は伝統ある学生会議の日本開催に参加でき、大変幸せに思う。本会議を通して、私は大きく2つのものを得られたと感じている。一つは、「日本人としての誇り」、もう一つは、「一生の仲間」である。

本会議に参加する動機として、日本の素晴らしさをアメリカ人学生にも伝えたい、

また自分自身もまだ知らない日本を発見したいという思いがあった。4つのサイトの中で、大学のある京都は私のホームであった。一方で長崎と岩手には訪れたこともなく、東京も遠い存在であった。それぞれのサイトで多くの貴重な経験をし、いろいろな人に出会い、JASC が終わってみると、どのサイトも私のホームのように思える。また、長崎で原爆や平和について、岩手では震災について、普段の生活では中々向き合わない問題について知り、考えることができた。

そして、JASC で最も大きかったものは71名の大切な仲間に出会えたことである。ただ共に過ごすだけではなく、大学では中々語る事はない日米が抱える社会問題について真剣に議論し合ったり、将来について夜遅くまで語り合ったりした経験はどれも私にとって大切な思い出である。この関係をただ夏の思い出だけでなく、これから先も長く付き合っていける仲でありたい。

最後にこの会議を支えてくださった実行委員を始め、多くの方々のサポートに感謝したい。ここで得たものを、自分の将来に活かし、社会に還元していきたい。

大沼 雄貴

Life Changing Experience、日米学生会議での経験を一言で表すとこれ以上の言葉はないだろう。日米の大学生が1ヵ月かけて議論と活動、共同生活を通じて協力し、時には衝突しながら相互理解を深めていく日々は、普段の学生生活では手に入れることのできない特別な時間だった。本会議が終わってまださほど時間がたっていないが、すでに参加者と一緒の時間を過ごせな

いことに寂しさを感じ始めている。私が本会議中、最も記憶に残っているのはアメリカ側学生に京都、長崎や東京の都市よりも、広大な自然や心の優しい東北、岩手の人との交流を楽しんでいる人が多かった事である。盛岡フォーラムで行った‘岩手をより魅力的にするには何が必要か?’といったテーマの議論ではアメリカ側学生が、どうしても岩手を発展させ、地域を盛り上げることができるかを真剣に考えている姿を見て、国家の枠を超えて社会問題に対して考えることが必ず日米両国の発展につながると強く思った。また多くの人が岩手を去るときに言っていた、「必ずまた岩手に戻ってくる。」という言葉聞いて、日本人として非常に嬉しかったことも強く記憶に残っている。アメリカ人と様々な場所に訪れ、真摯な議論を現地で行えたこと、岩手のような地方の持つ特有の問題に対して学生として提案を通じて、日米学生会議の参加者の一員として支援して下さった方に一つでもお返しできていたらうれしく思う。日米学生会議での日々が終わっても、1ヵ月間の活動と議論を通じて得た友人との絆はこれからも続いていくだろう。この1ヵ月間で得た経験、友情、相互理解を自分の未来のため、日米関係のために使えるようこれからも努力していきたいと思う。



大野 峻典

「8月9日」、僕らは長崎原爆資料館に行った。

原爆は恐ろしい、悪である。こんなに残酷な事は二度と起きてはいけない。みんなですべて平和を願おう。

そんなメッセージングを文字通りには受け取れなかった。もちろん、原爆の恐ろしさは凄く良く伝わってくる。しかし、一方で、原爆の恐ろしさを伝える事のみが、今後同様な歴史を繰り返さず平和な世界を実現するのに十分だとは思えなかった。

歴史を「全て」正確に伝えているわけではないかもしれない、と思った。日本だけではない。もしそれぞれの国が自国の都合のいいように、“被害”を誇張し、“加害”を正統化もしくはそこに焦点を当てていないかもしれない。

原爆に関して、日本は強く、その“被害”を主張している。歴史を繰り返してはならない！この事件を忘れてはいけない！と。だが、一方、その“加害者”アメリカへ、それはどれほど伝わっているのだろうか。

僕ら日本人が、このようなケースを“加害者”の立場にたって考えるのにはいい例がある。中国、南京にある、南京大虐殺資料館。そこでは、当時、南京の一般市民に対し“非道徳的”な虐殺を日本が“加害者”として行っていたか、様々な証拠と証言とともに語られているという。このような恐ろしい残虐はもう二度と起きてはいけない。平和を願おう。といったメッセージングを感じるという。

それが、原爆資料館と酷似していると感じ、僕は少しぞっとした。

果たして、ここで“加害者”である日本

で、それはどれだけ伝わってきているのだろうか。

毎年僕ら日本人は、原爆投下の日に黙祷を捧げ、それを、自分らの“被害”を忘れまいとする様々な取り組みを行う。

しかし、自分たちが、“加害者”になるケースについてはそうではない。忘れてしまっているかもしれない。

きっと、そんな国の教育は正しく歴史を認識し、過ちを繰り返さないために十分ではない。一つの国から見た、一つの視点では、足りない。

原爆は恐ろしい、悪である。強烈なメッセージング。以前、高校の修学旅行でここを訪れた時には、そのメッセージを素直に受け取った。

だが、今回の見学では、そのときと同じように素直にそのメッセージを飲み込むことはできなかった。今回は、当時とは違い、アメリカからの参加者の友人と一緒に回っていた。

JASCでは、自分の目が2つから4つになるような感じがする。全く違う視点を持つ、アメリカ側参加者の存在。率直にお互いをぶつけ合える環境。互いの信頼関係。

本当に平和の実現を考えるにあたって、視点を増やし歴史を捉えることが、今世界中で必要とされているのでは無いだろうか。

日米学生会議は、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年に発した。

今もなお、その理念を達成し続けている。

大日方 望

JASCは自分にとって、大きな一夏とな

った。言葉で言い表すことが難しいが、JASC で経験したこと、出会った人びと、交わした議論、考え感じたこと、それらの全てが、三週間という短すぎるほどの時間に凝縮されていた。一番印象に残っている出来事として、自分が、福島県の下宿先でのリフレクションの時に、原爆に対する自分の感情を吐露し、原爆についての議論がJASC 内であまりなされていないことへのいらだちを表明した時のことだった。自分の言葉に、人が傷つき、ショックを受け、また議論の種となったことに、自分は負担を感じた。しかし、その後できるだけ多くの人と会話をするによって、自分を理解してもらい、また相手を理解する、という凝縮された時間を過ごすことができた。個人は個人に敬意を表するとき、それは相手に惜しみなく自分の意見をぶつけることであるということに尽きると感じた。相手が、自分に意見を、批判を、惜しみなくぶつけてきてくれた時、初めて自分はこの会議に参加した意味を見出した。自分にとってアメリカは、国家か、オバマか、議員か、メディアか、ホワイトハウスだったが、この会議を経て、それに生の個人と、個人と、個人とが加わった。それは、日系人であり、アフリカ系、ヨーロッパからの移民であり、台湾、ベトナム、中国にルーツをもつ、アメリカのなかに生きる多様な人びとであった。この体験を通して、アメリカというもの広がり視点、また自分の身の回り社会を再考させる材料をいただいたと思う。日米学生会議。そこで何を体験するかは、自分の行動、自分の関わり方によるのだと、会議の終盤で気づくことができたのは大きな収穫であった。これまで JASC に自分が

期待したこと、それはこれから JASC が自分に何を期待するのかという問いへと変わっていくように思う。今年の JASC との、そしてこの JASC での出会いに感謝したい。



兼子 莉李那

第 65 回日米学生会議は私にとって文字通り **Life Changing Experience** だった。三週間の本会議中に限らず、春合宿で日本側参加者と出会ってからの四ヶ月間の出来事全てが、私にとって人生を変える経験だった。学生同士が特定のテーマについて長い時間をかけて本気で議論を行うことは、普段の大学生活では経験出来ない事であり、本気の人間関係を通して、お互いを尊重し尊敬し、友情も深まるのだということ、春合宿からの三ヶ月間と本会議の三週間で身を持って体験した。

本会議中は、障害者としての自分の経験が分科会テーマのマイノリティと差別に密接していたことから、時に感情が入り過ぎ

たこともあったが、分科会のメンバーの暖かい人柄に支えられ、普段は明かさな自分の心情を語ることも出来、私が本会議での目標としていた「マイノリティの立場だから言えること」を伝えることも出来たと、達成感を感じている。

分科会に限らず、日米学生会議の日程全てのコンテンツが貴重な経験だった。様々な企業・機関への訪問、日米両国の政治家の方の講演、レセプションでの様々な人々との出会い、そして長崎での原爆学習、岩手での震災学習・ホームステイ等、日米学生会議でなければ得ることの出来ない経験を沢山することが出来、自分の視野を広げることが出来た。

この日米学生会議の中で私にとって最も **Life Changing Experience** となったのは、日米の大学生と接するうちに、自らの持つ可能性を自覚し、将来について自信を持って前向きに考えられるようになったことではないかと思う。

そしてその自信から、第66回会議の実行委員に立候補し、当選することが出来た。今後は私を選んでくれた他の参加者からの期待に応えられるよう、未来の参加者たちに私が得たような素晴らしい経験を提供できるように、第66回会議の成功に向けて、実行委員としての自覚を持ち、精進したいと思う。

川口 真

“Life changing experience” —— JASC はこうよばれる。が、今のところ自分の何が変わって何が変わってないのかまだよくわからない。

僕の JASC での経験は一言では言い表せ

ない。楽しいことからつらいことまで様々あった。選考合格通知を受けた時、信じられないほどうれしかったこと。春合宿で素晴らしい仲間と顔を合わせ、これから始まるプログラムに胸を踊らせたこと。防衛大研修で安全保障について考え、沖縄では基地問題に関する様々な視点を学んだこと。本会議が始まり、分科会では英語の議論についていくのに苦労したこと、そしてその中でもなんとか発言しようとしたこと。議論の中で何も言えず悔しかったこと。毎夜2時くらいまで誰かとくだらないことも真面目なことも話していたこと…… 思い返せば走馬灯のように記憶が駆け巡る。日本の参加者とわずか知り合って4ヶ月、アメリカ側とはわずか1ヶ月にもかかわらず、濃い経験をしたためにとっても長いように感じられる。

JASC のおかげで得たものがある。**Energy** と **Friends** だ。JASCer はみないい意味で若かった。何事にも一生懸命であった。分科会でもそうだし、分科会以外の活動でもそうだ。難しいテーマでも果敢にトライし、レクチャーでは多くの質問がとびかった。現状に満足することなくチャレンジしている姿が美しく、自分も次のステップをふむ **passion** をもらったと思う。さらにかげがえの無い友達を得た。違う価値観を持つ友との交流は貴重だった。その彼らと3週間に及ぶ共同生活を経て様々な経験を共有した。共に笑い、共に泣いた。コミュニケーションによって相手のアイデンティティにも踏み込むことができた。ここでできたつながりをたやさずに将来にもつなげていきたい。

“Life changing experience” ——

「change」とは比較によって遡及的に明らかにされる。この経験を点としてきっかけとしてどの道に進んでいくかが重要だ。将来において自分は自信をもって JASCer であると言えるように、一步一步進んでいきたい。支えてくださった全ての方に感謝する。



川野 さりあ

1年前、一参加者として活動した第64回会議は毎日がただただ感動の連続だった。それまで自分が留まっていた世界がぐんと広がり、きらきらと輝く仲間と共に刺激に溢れる多くの貴重な体験を重ね、自分がかつて避けてきた諸問題にも逃げずに立ち向かっていかねばと一気に心に火がついたのだった。

そしてそれから1年。実行委員として見る日米学生会議は参加者として見るそれとは全く違った。65回会議が最高に充実した会議になるよう、その成功のために必死だった。しかし運営側に立つことは衝突の連続を意味し、私たちは実行委員会が発足したその日から本会議最終日まで、文字通り毎日が試行錯誤の繰り返しだった。日本側参加者内での問題はもちろんのこと、アメリカ側参加者と合流してからも文化的差異から生じる壁は数知れず。しかし思い返すと不思議なことにそれらを苦だと思ったこ

とは一度もない。それはいつの日も私たちに励まし、支えて下さるアラムナイの方々、企業、財団の皆様、そして同期の仲間がいたからである。そして何よりどんな困難にぶち当たったとしても、その先には必ずかけがえのない貴重な出会いや発見が待っていた。日米学生会議での得難い経験や、ここで築かれた人脈は間違いなく私の一生の財産である。

私にとって日米学生会議は「人」を学ぶ場であった。

人との出会いがこんなにも自分のものの考え方を変えるとということ、海の向こう側に生きる同世代の人たちがこんなにも違う視点で同じ問題を見つめられるということ。人と人をつなぐ言葉の難しさ、そして力強さ。

日米学生会議の一番の魅力はそこに集まる人そのものである。約2年間、この会議に参加して心からそう思う。

本会議を終え、参加者は再びそれぞれの道を歩み進めている。私もまた、本業の医学の勉強に集中しようとしているわけだが、この2年間で学んできたことを必ず活かし、どんな状況であっても「人」と向き合い、「人」を診られる医師になりたいと強く思う。

最後になりますが、主催団体の一般財団法人国際教育振興会の皆様、アラムナイの皆様、企業、財団の皆様を始め、当会議を実現させるためにご支援賜りました全ての方々に心より御礼申し上げます。

木村 優吾

日米学生会議に応募したきっかけは偶然同じ寮に参加者がいるということだけだっ

た。そこまでしっかりと事前に調べたりもせず、以前の参加者のひたすら輝いて聞こえる話しに聞き入り、その直観で応募した。

実際の会議は予想以上の波乱万丈な劇であり、毎日新しい刺激を受けた。時には肩を組んで慰めあったり、檄を交わしたり、また大声で笑いあったりした。もちろんいつも美しく、すばらしい時間ではなかった。人間の卑劣な部分を垣間見、うまくいかないことはたくさんあったが、それを全部含めてきれいごとではないすばらしさがあった。

分科会としては農業について農家の生の声を聞きながら学ぶことができた。以前に増して農業の大切さがわかり、私の消費生活にも影響を与えてくれた。実際に農業を体験しないでなぜ農業を語れる、というある農家のコメントが今でも強く印象に残っている。

農業についてたくさん学びはしたが、私にとって分科会は JASC における手段であると感じた。農業問題を議論することによって日米、あるいは人と人の相互理解を図る方法を学んだと思う。言語や文化の壁を乗り越え、最終的には人間は人間であるということを実感できたことが私の成果のひとつだと思う。つい相手はアメリカ人だから、文化が違うからなどと自分と違う理由を挙げて相手を遠のけようとするが、人をただ一個人の人間として扱うことができれば、文化などの違いも乗り越えられるものなのではないだろうか。私はそうであると信じてことができ、大いに人間の将来に希望を持つことができた。

活動中は自分のことでいっぱいだったが、今振り返ると本当にたくさんの方の支援の

元、今の自分があることに気付いた。賛助団体の方々、アラムナイ、フィールドトリップでお世話になった方々、IEC,ISC, EC, RT メンバー全員に心から感謝しております。

小林 薫子

私は人生の半分近くを海外で暮らし、インターナショナルスクールに通った。その結果、実力主義で外国人にもチャンスを与えるアメリカという国に関心を持った。そのようなアメリカの大学に留学したいと思っていたので、日米学生会議は大学生になったらぜひ参加したいと思っていた。その日米学生会議に今回は参加することができ、とても嬉しかった。国際問題に興味をもっている日米両国の学生と共に日米共通の課題に取り組んだことが私にとってとても良い経験であった。このプログラムを通して、相互理解の重要性と難しさを知った。私は帰国子女なので、英語にはある程度の自信があった。自分が考えていることを整理し、相手に正確に伝えること、また相手が発信していることを的確にとらえることが大切さだと痛感した。自分の専門の学問を深める努力と同時に今後も相互理解について努力をし続けたい。

また、日米学生会議を通して人的ネットワークのすばらしさを感じた。日米学生会議の参加者は問題意識が高く、よく勉強していて発言力もあり、尊敬出来る人たちである。そのような人たちと今回の貴重な経験を共有できたことは貴重な体験であった。国籍にかかわらず、同じ世代の人間として、これからも共に励ましあい、それぞれの夢を実現していきたい。そんな彼らは、一生

付き合える仲間であり、私にとってかけがえない存在だ。また、レセプションを通してたくさんの先輩方にお会いすることができた。学生時代の問題意識を生かしつつ、社会で仕事に邁進するその姿は、近い将来の自分の姿とも重なり、大きな励ましとなった。将来、自分も先輩方のように国際的に活躍できる人になりたい強く感じた。



小松崎 遥平

JASC で、人生が変わった。本当にそう思う。英語が伸びたこと、アメリカ人の友達ができただこと、今まで知らなかった分野に触れて教養が深まったこと、文化・背景・考え方といった点での日米の差を痛感したこと、断片的にあげていけばきりが無いが、それでも、自分の深層の変化をギリギリ突き詰めていけば、それは次のただ一点に集約される。才能に頼って努力を怠るのは、これで最後にする。この決意が私の **life-changing experience** である。私は怠惰な人間であるが故、受験にせよ、スポーツにせよ、大きな目標を達成したことが無い。それでも、生まれ持った才能か何かのおかげで周囲から評価・信頼を受けることが多かった。だから挫折もすぐに薄れ、また同じ失敗を繰り返す。ごまかし、ポテンシャル、要領のよさ、幸運だけで生きてきた。

今回の JASC もそうだった。直前合宿のリフレクションで語った、分科会活動に死ぬ気で打ち込んで教育問題という自分の「宿題」を説くという誓いも、すべてのイベントから学びつくすという決心も、アメリカ人と深く深く語り合いたいという期待も、最後にはボロボロだった。またか、もう、いい加減にうんざりだ、という失望があった。それでも JASC を愛しているから、私は EC 選挙に出た。選出され、周囲の顔を見渡した時、涙をこらえることができなかった。何度も成長の機会に恵まれては、それをどぶに捨てる私を、またしてもこうして拾い上げてくれる。自分は、何人の人に支えられ、何人の人を犠牲にして、何度同じ失敗をするのであろう。彼らは、なんでそんな私を認めてくれるのであろう。慚愧と感謝の念に堪えなかった。そして、私は日本側の実行委員長になった。もう怠惰は許されない。否が応でも自分を変えざるを得ない。私を認めてくれた彼らの為に、私は 66 回に打ち込もうと思う。「落選したやつらの顔を覚えておけよ」という 65th JEC の言葉を、「No laziness」という 65th AEC の言葉を、「66th JASC is for you.」という自分自身の言葉を、私は忘れない。

古村 大和

『個から集へ、集から個へ』

大和らしさ。本会議という多種多様な個性が入り乱れる共生空間で、それを如何に発揮できるか。私は幼少期を米国で過ごし、中学校の入学と同時に日本へ帰国した。人生の半分ずつを日米両国で生きた私にとって、日米学生会議が特別な経験となることは確信していた。私は「大和らしさ」を念

頭に置いて、人生が変わると噂される夏に臨んだ。

そもそも「大和らしさ」とは何か。日本に生きれば目立つ米国らしさ。その逆もまた然り。画一的集団の中で浮かび上がる異端児としての自分がいる。しかし、それはあくまでも異国文化の体現者として生まれる差異である。私が求めた「大和らしさ」とは、外国を紹介する橋渡しではない。日米両国での体験が融合し、日米のどちらかららしい自分ではなく、それを凌駕した絶大なる調和。その大きな和の中に「大和らしさ」があると考え。

いざ本会議を終えて「大和らしさ」を描き出すことができたのか。目指した姿は、集団の中の一人。しかし、その集団に欠かせない個人になること。総勢70名を超過する集まりの中で、必要な役割を「大和らしく」担うことを心がけた。具体的な事例は割愛するが、この目標は達成できたように感じる。日米の狭間で藻掻いた過去が確固たる土台として、理想の実現を生涯追求する未来につながる。日米学生会議がさらなる「大和らしさ」の表現に寄与していることは間違いない。

日本と米国。私にとって、この二つの国は変わることのない原点である。自らの軸を構成する両国の学生と過ごせた今夏。それを可能にしてくれた日米学生会議に、略儀ながら書中をもって深く御礼申し上げます。最後に、人生をかけて「大和らしく」生きることをここに誓います。

白畑 春来

JASC を通して何度も、自分の価値観や考え方といった深い内面の部分について相

談に乗ってもらい、また他人のそのような内面にも触れることで、自分とは違う価値観や考え方を知り刺激を受け、自分というものをいままでにないほどじっくりと見つめ直せた。JASCer にはお互いに足りない要素や直すべき性格を、疲れている時や夜が遅い時でも親身に遠慮なく指摘してもらうことができ、ただただ感謝の思いで溢れている。また、ちょっとした人間関係のこじれや、分科会内での議論の方向性の考えの違いなど、なにか問題が起きるたびにほかの JASCer が見せていた、しっかりと真正面から向き合い、解決しようという姿勢にはとても刺激を受けることができた。また、各々が今までの人生で構築してきた社会観や、アメリカと日本の文化・教育の違いについて熱心に語り合うことができたのはまたとない機会であり、そのような話題を気兼ねなく熱心に話し合うことで、得られた新たな観点や知識はどれも貴重なものであり、今後の人生において大いに役立っていくのだろうと感じた。最後に、去年からずっと本会議を成功させるためにたくさんの努力をして、準備をしてくれた実行委員のみなさんには言葉では表しきれないほどの感謝の意を示したい。分単位で決まっていた毎日のコンテンツをひとつもミスすることなく運営してくれ、またどのコンテンツにおいても十分に楽しませてくれ、いろいろなことを吸収させてくれた。事前活動はもちろん、本会議の3週間はあっという間であったが、思い返してみると毎日が充実しており、毎日何かしら新しいことを学べていたのだと感じた。



鈴木 健司

第65回日米学生会議が終わって1週間になる。これまでの参加者の方々がそうであったように、今この日米学生会議が私自身にとって、どのような存在であったかを言い表すことは難しい。「熱い思いを持った一生付き合えるような友達を作りたい」そう思い、応募した日米学生会議。軽い気持ちで応募した訳ではなかったが、私にとっては自分自身を見つめる葛藤の毎日だった。春合宿で初めて参加者36名が集まり、そこで参加者それぞれの個性に触れた。一人一人が個性を持ち、それぞれが輝いていた。その中で、私が自問自答し続けたのが、「この36人の中で自分のできることとは何なのか」ということだった。この問いに対する答えは簡単には得ることができず、自問自答し続けたまま本会議に突入していった。本会議に入り、アメリ36人と合流することで、その問いへの答えはより分からなくなっていった。しかし、本会議を通して、他の様々なデリとの会話において、自分というものが次第に見えるようになってきていた。深く、熱い話ができるというJASCならではの雰囲気の中で、自分というものを他のデリに見てもらおうことで、一人では分からなかった部分などを知ることができたように思う。しかし、この会議中に問い

への答えが明確に得られた訳ではない。それでも、70人を越える日米の学生との共同生活を送る中で、笑い、悩み、泣き、毎日考え抜くことで、また新しい一步を踏み出したように感じる。さらに気づいたのは、分科会活動をはじめ、一人では決してできないことがJASCを通して数多く経験できたということだ。改めて、チームの素晴らしさやチームでしかできないことを実感した3週間でもあった。

JASCでの経験がどのように活かされるか、今は分からない。それでもこのかけがえのない経験と「Once a JASCer, always a JASCer」この言葉を胸に、これからも日々精進していきたい。65th JASCに関わって下さった皆様本当にありがとうございました。

鈴木 悠司

「JASCを通して学んだものの中で、一番大きなことは何か」ということを、ファイナルフォーラムが終わったあたりから自問自答するようになった。本会議中は毎日の生活についていくのが精一杯で、JASCの成果について十分整理することはできなかったが、今思い返してみると、そのように必死になってもがき続けたという経験が非常に大きな財産になったのではないかと考える。

私にとって本会議の23日間は決して「楽しい」「充実している」といったポジティブな感情だけで形容できるものではなかった。むしろ、全く異なるバックグラウンドを持つアメリカ側参加者とともに生活し、今までほとんど興味すら示すことのなかったトピックについて考え、到底使いこなせるとは言えない英語を使わなければいけないと

いう、大きなストレスや苦しみを終始抱えていたと思う。本会議に入る前に、積極的にできるだけ多くの人と様々な議論を交わそうと決意したはずなのに、英語力や知識の乏しさゆえに議論に全く参加できず、悔しい思いをしたり、ひどく劣等感を感じたりしたことも一度や二度ではなかった。

しかし、そのような状況に直面したときに、自分の悩みを聞いてくれる人が必ずおり、彼らの助言も借りながらなんとか困難を克服しようとし続けたことで、23日間の本会議で全力をつくすことが出来たと考える。また、そのように悩みを相談し、助言を求めるということは次第に私の JASC の中でのコミュニケーションスタイルの一つになっていた。決して格好いいスタイルではないかもしれないが、そうやって多くの参加者と会話をするなかで、多種多様な物の考え方や価値観に触れることができ、それら一つ一つが私にとってとても心躍る経験であった。もがき続ける中で大勢の人に支えられ、多くの学びを得た。実行委員や参加者を始め、この JASC に協力していただいたすべての方々に改めて感謝したい。

関口 響

本会議の予定表を見返すと、ひとつひとつの思い出が映像となって脳裏に蘇る。仲間が流した涙。たわいのない会話で笑い合った日々。そこには年齢も、国籍も存在していなかった。七十一人の人間がただただお互いに真剣に向き合い、相互理解を追求した夏であった。また同時に、他者を知るなかで僕らは自分自身を深く見つめ直し、自己理解を深めた夏でもあったのではないかと思う。「自分とはなんなのか」「何を目

指して生きているのか」自分すら明瞭な答えの出せていない問いに対して、JASC の仲間は本気で耳を傾け、意見を与えてくれた。それはまるで自分の中に眠る原石を仲間と共に磨き上げていくように感じられた。そしてそのおかげで、僕は原石の一寸の光を見出すことができ、「自分らしさ」と「将来像」をより具体化できたと思う。

JASC が人生を大きく変えた経験であったかどうかは、未だ定かではない。英語力が格段に伸びたかという、そういう訳でもない。しかし僕は、**Life Changing Experience** というものは JASC を終えた後の人生のなかで静かに実感していくのだろうと確信している。二十歳の夏に得た知識や学んだ経験がいつかなんらかの舞台上で活躍する際に不意に感じられ、活かされているのだろう、と。

第六十五回を終え第六十六回の実行委員になり、底知れぬ期待が胸に溢れている。もちろん不安もあるが、むしろ、この夏のような「相互理解」と「自己理解」を、まだ見ぬ素晴らしい仲間とともに再び経験したときに見えるその先の世界と自分の深淵を知ることが楽しみでならないのだ。そしてそのための努力は惜しまないつもりでいる。

僕はいま、新大阪へ向かう新幹線に乗っている。関西に住む JASCer たちに会いに行くためだ。きっと将来、僕は飛行機に乗っていることだろう。世界で活躍する第六十五回日米学生会議の仲間たちを訪ねるために。

竹内 正人

長い歴史と伝統への責任。そして、新たな開拓。この一年、実行委員長に就任し、

今まで以上に自分について考える機会が多かった。いい意味でも、悪い意味でも自分にとって何を一番に大事にしているのか。自分は何が好きで、何が嫌いでなんの為に今生き続けているのか。そんなことを考えながらこの一年間過ごしてきた。

他の人と自分は違う。この会議を終わるまで自分の頭の中はこの言葉が何度もまわっていた。人によってそれぞれ生きてき道はもちろん異なるが、専攻分野も物の捉え方も違う自分がこの会議で果たせる役割は一体どんなことなのかを考えて進んできた。第64回日米学生会議に参加者として参加した時、現実とは掛け離れた異空間において自分の将来の方向性について必死に考えた。しかし、見つけた答えは自分が予想していた場所ではなく、身近なところにあった。というよりは、自分の中に答えはあったもののなかなか前に進めなかつただけだったのだと今は思う。そして、実行委員長として迎えた第65回日米学生会議。就任当初は期待はなく、不安でしかなかった。同時に自分の決めた進路への不安もあった。しかし、今だけしかできないことを今やるというスタンスは自分の中で変わっていなかった。

LIFE CHANGING SUMMER。人生が変わる夏というと大げさに聞こえるかもしれないが、自分が感じたその経験を一人でも多くの人にしてもらいたいという思いでプログラムを作った。会議の中盤、意見の対立、衝突はもちろんあった。時間は掛かったものの、人に頼らず自分で前を向いて懸命に会議に関わっている参加者の姿勢を見て感慨深いものがあった。

最後に、いつも身の回りで支えてもら

った全ての人々に心から感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。



中澤 彩

5月の春合宿から始まり夏の本会議が終了するまでの約4ヵ月間を思い返しながら、今この感想文を書いている。つい数日前に本会議は終わったばかりであるが、本会議中の寝不足、疲労を抱えながらの熱い議論や友との楽しいやり取りは、遠い昔にあった、別世界での出来事のように感じる。本会議前から予期していたことではあるが、完全なる“JASCsick”である。

私は JASC65th が始まる前、“Life-changing Experience”という言葉に対し、期待、疑い、不安が入り混じった複雑な感情を抱いていた。多くの Alumni の方々が JASC での経験をそのように言い表すのを聞いて、いったい JASC とはどれほど素晴らしい経験を与えてくれるのか、JASC を経験することで将来の幅が広がり、自分が人生を通してやりたいことを少しでも明確にできるかもしれないと期待した。しかし同時に、たった数ヵ月で“Life-changing”というのは大げさではないかと疑った。また、例え JASC にはそれほど価値があるとしても、その価値を最大限掴むことができるかどうかは個々人の努力・能力次第であり、私にそこまでできるかどうかという不安があった。

本会議を終えた今、特に大きな後悔はな

い。では、JASCでの経験はLife-changing experienceであったかどうか。正直のところ今の段階では私の人生を変えたとはまでは断言できない。ただ、異なるバックグラウンドの人達と出会い、日本の各地に足を運び、それぞれ悩みを抱える中にあっても努力することを惜しまない友と議論することを通じ、自分を客観的に見直す機会を得た。そしてとても前向きに、時間は有限であるがゆえに、何に関しても目標達成のためには努力を惜しまないと決意を新たにすることができた。

ただ今後を漫然と過ごすだけでは、今回の経験がLife-changing experienceとなることはないと思う。JASCを数多くあるサマープログラムの一つとするか、Life-changing experienceとするかは自分次第であると思う。今回学んだこと・得た刺激を維持し、努力を継続していかなければならない。そうして数年後、JASCの真の価値に気付くのだと思う。



中村 優太

はじめに、第65回日米学生会議の開催に際し多大なご支援とご協力を賜りましたことをここに深く感謝申し上げます。すべての出来事に意味がある。JASCに参加するまで、社会に蔓延する問題を認識していたものの、それらを学生間で議論を真剣に交わしたことを経験したことがなかった。そ

のこともあり価値観、背景、経歴の違うみんなと過ごした4ヵ月はいままで経験したことのないほどの感動、葛藤、衝動、衝突をもたらし、私を一回り二回り大きく成長させてくれた。今日日本を取り巻く情勢は決して芳しくはなく、とりわけ日中関係が冷え込んでいるなか、日米学生会議伝統の安全保障分野の分科会を担当したことは学生会議としての意義は大変大きく、しかしながら、その様な状況のなかで我々学生が果たす役割は何なのか、期待されていることは何なのかを常に意識し、自身に問いかける必要があった。振り返ると、今しかできない、学生だからこそ既成概念に囚われない自由で活発な議論が生まれた。言葉の壁や人間関係に何度も挫折し、何度も逃げたときもあった。そのとき互いに悩みを打ち明け、解決策を模索していく中で互いを尊敬しあい、互いに感化しあい、個人を超えた世界観を共有することができたと感じた。JASCを終え、学んだことは数えられない。そのなかでも特に肝に銘じておきたいのは「現地主義」である。数多くの講演会、施設訪問、地元の方々との交流を通して情報媒体によって操作された情報だけを頼るのではなく、実際に問題とされている地域へ赴き現地の方々の「生の声」を聴くことで、真に問題とされている本質を見極めることができたと感じたからである。これから次世代を担う我々若者が閉塞した社会問題を柔軟に対処するにはまさに「現地の声」から聴くことから始まると思う。改めて、第65回日米学生会議の開催にご理解とご協力を賜りましたことを感謝申し上げます。

野口 ゆかり

実行委員としての業務に励んだこの1年間は長いようであつという間に過ぎた。振り返ってみると、今までで最も密度の濃い期間で、非常に充実していたが、決して楽な1年間ではなかった。実行委員全員が「65回会議の成功のために」という同じ目標を共有しているのにも関わらず、どうしても目標達成のアプローチ方法で衝突を繰り返してしまうことが歯がゆくもあり、フラストレーションでもあった。私達なりに準備してきた「最高な会議」の1か月間という限られた時間の中で、参加者が何かを得て変わることができたのかどうか、それは会議が終了した今もはっきりとは分からぬ。答えのない答えを追い求めることは、先が見えない暗闇の中をマラソンしているようで、時には自分を見失い、仲間を見失い、どこにゴールの方向があるのか見失いかけることもあった。しかし、問題の山にぶつかる度に自分の弱点を痛感したのと同時に、周り仲間の支えの力の大きさを実感した。

一人一人の果たすべき役割はあるものの、結局一人だけでは何もできないことを真っ向から気づかされ、全員で何かを作り上げることの難しさと素晴らしさを実感できたのは間違いなく仲間の実行委員を初めとする、多くの方々のお蔭である。盛り上げ上手ながーに一、いつも一番の相談相手になってくれたさりあ、皆を支えてくれた縁の下の力持ちののぶ、ちょっとした気遣いがすぐできるちゃき、ずっと皆のこと大好き人間でいてくれて皆をまとめようと努めたまあや、スパイスのような存在でありながら常に安心感をもたらしてくれたミン、そして最も役職が重複し上手いかなこと

が多々あって迷惑ばかりかけても、最後まで情熱を絶やさず献身的に一緒に仕事をしてくれたいっち。個性的なメンバー揃いの第65回参加者たち。困っているといつも励ましてくれた第64回の同期たち。皆に感謝の気持ちを十分に伝えきれないまま、すぐに留学先のカナダに渡ってしまったけれど、本当にありがとう。

最後に、主催団体の一般財団法人国際教育振興会を初め、OB・OGの方々、そしてその他多くの関係者の皆様のご支援ご協力なくしては私がこのような経験をさせて頂けることも、第65回会議を実現させることもできませんでした。心より御礼申し上げます。

次世界のどこかで皆様にお会いする時は一回り大きくなった自分をお見せすることができるよう、日米学生会議での経験を軸に今後も精進して参ります。

野口 真央

JASCの3週間は気付けば折り返し地点を過ぎ、そしてあつという間に幕を閉じた。本会議が終わって1週間経った今、未だに充実した日々の余韻に浸っていて、写真を見返しては寂しい気持ちになることも頻繁にある。

このあつという間に終わってしまった3週間にわたるJASCの何よりも素晴らしさは、人との出会いだと思う。日本の大学生という限られたコミュニティーで生活してきた自分にとって、日本、そしてアメリカの各地から集まった全く異なる価値観を持つ参加者との出会いこそlife changingだった。個性豊かなJASCerと共にした本会議での生活は相互理解にすぎるものではな

く、相手を知ることはもちろんだったが、相手から受ける刺激で自分自身を発見する大きな機会だった気がする。将来の夢もまだ不確かで自分自身を模索していた私にとって、自分を刺激し、勇気付けてくれる仲間との出会いはこれからの自分を真剣に見つめて考える大きな転換点となった。

一日の平均睡眠時間が3時間という過酷な環境のもとで、時には挫折をしてしまいそうなくらい集団行動での人間関係に悩んだり、疲労の蓄積で気持ちが引き締まらなかったりという沢山の厳しい条件が立ちまわっていたが、そんな自分を常に支えてくれたのは JASC の仲間だった。みんなそれぞれ悩み事を抱えていたが、同じ環境で共に生活する仲間からの支えは特別だった。出会う間もないのに初日の夜からお互いが抱えてきた悩み事を打ち明け、何年も前から知り合いのように接することができた素晴らしい仲間に出会える場は JASC 以外に他ならない。

本会議が終わり、元通りの環境に慣れ始めている自分に少し寂しい気持ちを覚えるが、一皮剥けた今年の夏を忘れることなく JASC で学んだこと、感じたことを最大限に活かして今後の自分を見据えていきたい。



橋本 萌

日米学生会議本会議が始まる前に、この

夏は life changing summer になると言われていたが、正直それは誇張された表現だろうと思っていた。しかし第 65 回日米学生会議が終わった今、この夏は私にとってかけがえのない life changing なものになったと自信を持って言うことができる。

私の属していた「差別とマイノリティー」の分科会はジャパデリもアメデリもどちらも個性の強い人が多く、非常に色の濃い分科会となった。JASC の何よりも大きな収穫はこの分科会で普段は深く話せないようなセンシティブな内容の議論を1か月近くの間できたことである。このような議論を重ねる前までは、日本社会は自分にとっては暮らしやすい快適な場所でありそれに対する疑問を抱くことなく生きてきた。しかしこの1か月で自分の考え方は大きく変わり、初めて社会を疑問視することが出来るようになった。自分の中の大きな一歩だと思っている。もちろんセンシティブな議題だけに何もかもがスムーズにいったわけではなく、途中では認識や考え方の違いが露呈してしまうこともあった。しかし社会の表舞台には出にくいような話題を時にはぶつかり合いながらも話し合ったことで、真の仲間を作ることができた気がする。このような機会を下さった JASC に心から感謝している。

また、JASC に参加したことにより、まだまだ自分の将来には無限の可能性があるということを実感することができた。様々な場所を訪れ、様々な人から話を聞き、そして国を超えた同世代の人々と将来について語ることで自分の知っている世界の狭さを認識した。考える度に不安になっていた自分の未来像だが、初めて楽しみだと思っ

ことが出来ている。JASC がどのようにして未来の自分に繋がっていくのが今から楽しみだ。

たったの1か月弱だが、JASC は自分という人間を一回り成長させてくれた。このような会議に出会えたこと、そして参加できたことを心の底から嬉しく思う。

浜田 りん

「JASC ほど濃い1か月は、もう二度と訪れない気がする。」先輩 JASCer 達が口をそろえて言っていた言葉が、今まさに私の中にある。それほどまでに、JASC は非日常的で、刺激的で、かけがえのない空間だった。

私が JASC で得られたものは、3つある。1つ目は、質の高いディスカッションだ。普段の大学生活では、友達と議論する機会はめったにない。授業でディスカッションが行われても、学生によってモチベーションの高さにバラつきがあったり、浅い議論で終わったりしてしまうことが多かった。JASC には、本気でディスカッションをしようと意気込む学生ばかりが集まる、まさに私が望んでいた環境だった。さらに、普段交わることのない他学部生と議論ができ、異なる視点からの意見も聞いた。今後の勉強に活かしたい。2つ目は、日本を学べたことだ。私は、今まで関東から出たことがほとんど無かった。そのため、長崎サイトや岩手サイトがとても印象に残っている。それぞれの町、歴史、文化に感動し、もっと早く地方を訪れたかった、もったいないことをしたなと思った。まだまだ私の知らない日本がたくさんあることを痛感した。3つ目は、今後も大切にしたいと思える仲間

だ。夢や目標も堂々と語れる、真剣に耳を傾ける雰囲気が、とても心地よかった。将来について生き生きと話す友人の姿を見て、私も、もう一步頑張ってみようと思われた。JASC で感じた、楽しさ、悔しさ、一つひとつの経験を忘れず、更なるステップアップに繋がりたい。

三科 圭介

私が JASC を通して得たことは大きく分けて二つある。

①「文化の違い」②「出会い」。まず文化の違いに関して述べる。本会議前、「文化の違い」は旅行で学べることだと思っていた。ただ本会議が終わった今、それが間違いであることに気付いた。例えば分科会のミーティング時、議論を交わすのに日米間で議論形式が異なった。日本は目的に合わせて構成を作り、議論することを好むのに対し、米国はフリーディスカッションを好む。そのため議論が進まないことが多々あった。ただこの両方に良い点、悪い点があることに気付き、どのようにこの二つの異なる議論形式を用いればお互いの良さを引き出していけるのかを考えることが出来た。この体験は、これから私達がグローバルな世界で生きていく上で、とても大切な経験になったことを確信している。

2つ目は「出会い」について述べる。72人の全く異なる経験を持つ学生が JASC を通して出会う。そして72人全員の意見や考え方が私にとっては新しく刺激的であり、自分が狭い世界で生きてきた人間であることを認識させられた。この出会いにより私の視野が広がり、沢山の可能性を見つけることが可能になった。「出会い」の大切さを

最も感じた3ヶ月であった。

JASCが終わった今、この2つの学びを含め私が成長するための「種」を得ることが出来た。したがって、これからの人生でその「種」に花を咲かせるか、そうでないかはこれからの私次第である。そしてそれが出来たときに本当のJASCの価値を知ることが出来るだろう。このような素晴らしい機会を与えてくれたことに感謝する。



森 泰子

春合宿で初めて日本側参加者と顔を合わせたのが5月。それから3ヶ月間の事前準備を経て迎えた本会議は、本当に密度の濃い1か月だった。

アメリカ側参加者は、日本側に負けず劣らず個性的なメンバー揃い。それと同時に、日本という国や文化にとっても興味があり、オープンマインドな人が多かったように感じる。

今回、アメリカ側参加者は多くの文化の違いに触れたと思うが、それを拒否せず新しい知識や経験を求める積極的な姿勢にとっても刺激を受けた。

また、日本開催の本会議は、私自身勉強になることも多かった。今回日本各地を回って自分の目と耳で体験して、これを機にもっと日本のことを学んで海外にその魅力

を発信していきたい、と改めて思った。

分科会では、やはり議論の結果を出すことに目が行ってしまい、意見がぶつかりがちだった。衝突して絆が強まることもあるだろうが、私個人的には、闇雲にぶつかるよりも、各々の個性や主張をつなぎ合わせたいと思いがあった。各メンバーの話を聞き、議論では仲介しようとしたが、なかなか皆が一つになれない現状に焦って悩んだが、思い切って自分の想いを素直にそのまま伝えてみたら、それに応じて皆の本音も出てきて、隠れていた誤解や確執も解くことができた。衝突は避けても本音を伝えることの大切さを学べたと思う。

1ヶ月しかない中で、恥ずかしさや遠慮を捨てて本音を出せる関係になれるというのは、とても恵まれた環境であった。

フィールドトリップや分科会活動以外に、みんなと話す時間が本当に楽しく有意義で、睡眠不足なのにも関わらず、バスや飛行機などの移動時間や夜は寝る間も惜しんで話していた。楽しくて面白い話から真面目な議論まで、話の引き出しが豊富な人ばかりだった。

一人一人、本当に個性があって魅力的な人たちで、まだまだ話し足りない、というのが正直な感想だ。今後も一生続けていきたい大切な仲間が出来たことに本当に感謝している。

森田 修弘

一年間自分の持つものすべてを注いできた日米学生会議が終わった。今感じているのは「悲しみ」でも「達成感」でも「喜び」でもなく、「空白」である。65回会議の実行委員に就任してから毎日、毎分、每秒65

回会議のことを考えてきた。その会議が終わった今自分は何を目標にこれから一年生きていけばいいのだろう。終わってみて初めていかに自分がこの会議に入れ込んできたのがわかった。大袈裟に聞こえるかもしれないがこれが今の正直な気持ちである。そんなことを思いながら、締め切り直前になってこの文章を書いている。

この一年を振り返ってみて JASC を通して一番学んだものは何であったか、それはやはり「感謝の気持ち」の大切さである。日米学生会議は多くの人に支えられて成り立っている。直接関わる機会のある方もいれば、一度もお目にかかることなく終わってしまう方もいる。しかし、そのような機会のあるなしに関わらず、この会議の活動に理解をいただき支援・応援をしてくださる方がいるからこそ私たちはこの経験を得ることができるのである。また、実行委員が日々の活動をできるのは事務局の方たちがいるからであり、各開催地で様々なコンテンツができるのは協力してくださる現地の方がいるからであり、今の日米学生会議があるのはアラムナイの方たちがいるからである。言い古された言葉であるかもしれないが、「あたりまえ」など一つもないのだと改めて感じた一年であった。この場を借りて改めてすべての関係者の方々に御礼申し上げます。

最後に、共に一年間 JASC を作ってきた実行委員の皆に感謝をしたい。その中でも特に一緒にサイト運営をしてくれたさきあ、ありがとう。お互い頑固で素直じゃない故にぶつかることもあったけれど、サイトのみならず一年間一緒に仕事できて本当に良かった。去年の夏、悩んだ末に EC にな

るといふ決断をしてくれてありがとう。

JASC is Just About Seizing Chance. JASC の終了は終わりであると同時に始まりでもある。JASC を通して得た Chance をしっかりと掴み、前に進んで行きたいと思う。



横田 真彩

人の想いがどれほどに温かく生きたもので、それぞれにとり心強く、そしていかに力強い「実行力」となる可能性を秘めているか。これが、実行委員としての一年間を経て、肌寒いカナダの地で今、自分が少し自信に似たものを伴って手にしている実感である。今となってはすべての瞬間が恋しく愛しいが、きれいな思い出物語として終わらせたくない。一つ一つ噛み砕くには時間がかかるから、まず今は心からの感謝を伝えようと思う。

今思えば、実行委員会でも分科会でも、各々のあまりにも真っ直ぐな想いが交錯していたがゆえに起きていた衝突。それでも妥協することなく、同じ日本側だからこそ発生した大きな差異、そしてアメリカ側との間にあった大きな壁も、すべて越えたところで互いに「信頼」を強く求め続けた日々だったように思う。辛く、苦しくもあったが、皆で乗り越えた時に大きな喜びを共有

できる瞬間が、それらをすべて愛しい思い出に変えてしまうほどに、あまりにも美しかった。

長かった1年間を共に駆け抜けた、誰ひとりとして代わりの利かない実行委員会、5月に顔を合わせてから加速するように気持ちを一つにしていった第65回会議のみんな、会議の実現に至るまでどれほど失敗や迷惑をかけ続けても惜しめない全力での応援を下さった、諸先輩方を始めとする本当に沢山の方々。それぞれの想いを全身で感じる中で、責任を感じ自信を無くしながらも幾度となく励まされ、本当に多くの学びの機会を頂いた。このような溢れかえるほどの想いが集結する場にいられたこと自体に、深く、心から感謝したい。

一見、何と理想的な感想かと思われるかもしれない。だが、これこそがこの一年間を経て今、漸く辿り着いた、私にとっての真実である。青い20歳の私が強く思ったのは、例えどれほど辛くて苦しい時期が続いたとしても、最後まで諦めずに真っ直ぐそこにある想いと希望を信じ続けることが大切であるということだ。人の想いの中で生きることの魅力、有難さ、喜びを分かち合うことの幸せを少しでも知った以上、そうした自信を抱いて前に進むことが使命だとも感じる。

世の中はきっとそんなに甘くない。必ずしも目標を共にする仲間や、力強く応援し続けて下さる方々に出会える訳ではないだろうし、今の私が予想もしないような困難にぶつかる日だってあるだろう。けれど、現実にも目を向けながらも今手にしている実感を感じ続け、時にかげがえのない家族の様な仲間と励まし合いながら、私らしい方

法で恩返しをしていくために日々を一生懸命積み重ねていきたいと強く思う。

吉井 拓真

何と表現できようか。

本気で取り組んだ準備期間、この上なく充実した本会議の数日、そして不本意な形で迎えた終わりを。

病室では一人考え事に耽る時間が多く、ぶつけようのない後悔や無念が走馬灯の様に脳裏をよぎった。自己管理が至らなかった点、周りに負担をかけてしまった点、自分が思い描いていた程自分を出し切れなかった点。これほど悔しさを感じたことは生まれて初めてだった。しかし、自分の身に起こったことは現実であり、時は非情にも進んでいく。現実を前向きに捉え、明日に活かさねばと強く自分に言い聞かせ続ける毎日であった。

ただ全ての日程をこなせなくてもやはり、この会議に参加できたことは私にとってかけがえのない財産であると断言できる。合格し、参加してからの道程は決して平坦なものではなかった。自分の学業や課外活動と並行する事が困難な時、個性の強い分科会で足並み揃えて進んでいくことに不安を抱いた日もある。しかし道程が険しかった分、人並み以上に情熱的になれた。全力で取り組むことで初めて見えてくるものを楽しみに、自分の持っている全てをぶつけようと思い、それを実行できたと自負している。手を抜いたことは一度もないし、自分が参加している間は100%の自分を出しきることができた。これでもよしとしたい。

そして何よりも財産になるのが出逢いだ。この会議に参加したくて叶わなかった方は

デリの人数以上にいる。そうした方々の無念の中で私は皆と出逢うことができた。夜遅くまで語り合った友人。別れ際に泣いて共に悔しがってくれた友人。入院してからも気にかけてくれた友人。国境や年齢を越えた一人一人との出逢いが私を強くしてくれた。有能で心優しい多くの仲間と出逢えたことを心から誇りに思う。

最後に、この会議を支えて下さった多くの方々、アラムナイの方々、病院に連日付き添って下さった後藤様、仲間達に深く感謝したい。

最高の経験をありがとうございました。



吉田 知史

1934年、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下に発足したのが、我々の日米学生会議です。日米戦争を回避するという社会的な役割がこの会議にはあったのです。だからこそ、私は参加が決まってからというもの、「この会議が社会に対して果たすべき・社会から期待されている役割とは何か」という問題に長く苦しめられてきました。「最後のファイナルフォーラムや報告会などで、

日米、そして世界が抱える問題を学生の立場から議論した成果を社会に向けて発信する」。準備期間において、私はこれが日米学生会議が果たすべき役割であると考えていました。

しかしながら、本会議が始まると、それは結局「相互理解」を図ることだと気づきました。それまで、日米間の相互理解は留学などで十分に出来る為に、日米学生会議の役割ではないと考えていました。けれども、本会議が始まって以降認識させられたのは、日米学生会議以上に世代を跨いで日米交流の中核を担えるものはないということでした。あれ程までに互いのアイデンティティ・バックグラウンドを考えぬくことを避けずに、1つ1つ文化の壁を乗り越えていくという経験はありません。分科会の議論はそれを行うきっかけを与えられているに過ぎず、社会的な役割は互いのことを理解しあった仲間が太平洋を超えて存在し、互いに様々な分野で活躍することで果たしていくのだと知りました。

それからは、今まで話すことのなかったメンバーとも積極的に交流を図り、居心地悪く感じる文化的差異などについても正面から話すことを心がけました。すると会議が終わる時には、全員でないにしろ心の底から親友だと言える仲間が出来た、と胸を張って言えるようになりました。ただ、我々はまだスタートラインにたったに過ぎません。これから、互いの分野で成功を果たすことが求められています。

